

廃校の夏

難聴児たちの甲子園

小野卓司



| 著者 | 小野卓司 1947年、東京・新宿に生まれる。1967年に東陽一監督
の助
後、
の
ド
題

その
最初
・レビ
」の

はいこう なつ なんかいし こしとまへ
廃校の夏 難聴児たちの甲子園

おのたくじ
小野卓司

© Takuji Ono 1991



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

1991年5月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3509

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——有限会社中澤製本所

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてをお願いい
たします。 (庫)

ISBN4-06-184918-2



講談社文庫

廃校の夏

難聴児たちの甲子園

小野卓司

講談社

目次

プロローグ

7

1 赴任

11

2 誕生

17

3 うつる

30

4 北城ろう学校

49

5 野球部結成

67

6 高野連

80

7 初の公式戦

106

8 問題児 114

9 女子マネージャー 137

10 はじめての一勝 162

11 最後の試合 180

エピローグ 208

文庫版のためのあとがき 218

解説 伊藤政雄 230

廃校の夏

——難聴児たちの甲子園

プロローグ

一九八一年秋。沖縄から二つのニュースが日本全国へ伝えられた。

一つは沖縄本島北部、山原やんばるの国頭村くにがみせん山麓で新種の水鳥が発見され、ヤンバルクイナと命名されたことだ。北緯二十六度線附近に点在する琉球列島には、イリオモテヤマネコ、ノグチゲラなど、温帯と熱帯とが混り合まじう亜熱帯の快適な風土がめずらしくも貴重な動植物を育はぐんだ。ヤンバルクイナが発見によって沖縄の風土があらためて見直されることになる。

もう一つのニュースは、

へ全国初

ろう学校硬式野球高野連加盟

へ高野連のファインプレー

とスポーツ欄の見出しは伝えた。

日本ではじめて硬式の高校野球に、風疹児といわれるろう者だけのチームの参加が認められたことである。

沖縄本島中部にある風疹児だけの北城^{きたしろ}ろう学校野球部が高野連に加盟したニュースは、全国の同じような障害を持つ人々を勇気づけることになった。

「今朝、北海道新聞朝刊にて報道されました。おめでとう。私は六十五歳で右の耳が八十デシベル、左が八十五デシベルでみなさんと同じ障害者です。

このニュースはとてもうれしかった。風疹という突然の罹患^{りかん}による障害に負けず、よく成長されました。

ケツパレ、ケツパレ（方言でがんばれ）」

と書かれたハガキが届いたのをはじめとして、北は北海道から南は石垣島に至るまで、反響は障害者だけに留まらず、全国各地の老若男女から激励の手紙や電話が各新聞社、そして北城ろう学校に寄せられた。なかにはカンパや野球用具の寄贈を申し出る人もいた。

風疹児とは、今から二十数年前、妊婦の風疹感染によって、障害をもって生まれた子供たちのことである。その数は五百名近くにのぼる。当時はまだ医師でさえも知識を持ち得ず、妊婦はなおさら無知であった。

世界的にみても、アメリカで風疹ワクチンが使用されるようになったのは一九六九年からであり、日本では、一九七五年、アメリカより六年遅れてようやくワクチンが承認され、予防対策が立てられるようになったほどだから、当事者は無論のこと、世間的にもさまざまな誤解と偏見を生むことになった。障害児をかかえた親、そして育っていく障害児本人に、その後、幾多の困難がのしかかってくることになる……。

風疹児たちは成長し、やがて、中学進学を迎え、風疹児だけの学校・北城ろう学校きたしろに入学する。

北城ろう学校が全国に名を馳はせることになった高野連への加盟問題は、風疹児たちにとって、また彼らを指導する立場にありながら確たる指導方針を持ち得なかった教師、そして彼らに付き添って一生生きなければならぬと覚悟を決めていた父母たちにとっても、埋うめもれていた意志と希望の発露であり、子にとっては親離れ、親にとっては子離れの明確な一線を引くきっかけになる大きな出来事であった。

しかし、一人の生徒の発意と、そこに集まった十六人の部員、五人の女子マネージャー、そして熱情あふれる一人の教師の存在がなければ、その小さな芽も、日本列島最南端の沖縄県はもとより、北城ろう学校のある北中城村屋宜原きたなかぐすくそんやぎばらの地域からさえ一步も出ずに埋もれてしまい、他県をふくめた障害者に留まらず、健常者をも励ます大きな力になるまで成長することはなかっただろう。

耳に障害を持つ十六人の子供たちが、幾度となく立ちふさがるさまざまな障害を乗り越え、高野連加盟を出発点として、健常者となんのハンディもなく試合を行ない、しかも相手チームと対等に戦うまでに至った経緯は、いまは、廃校ののち引き継がれた現在の沖縄ろう学校の校庭の一隅に建てられた、かつて北城ろう学校が存在したことを留める石碑で偲ぶのみである。

1 赴任

沖縄の夏は、四月ともなると、早くもその匂いを発散しはじめる。

デイゴの花は、真紅の肌をあらわにしていき、サンゴ礁を伝ってくる風は、デイゴの香りとともに沖縄を夏へ染めあげてゆく。

四月はまた、異動の季節でもある。

大庭猛義おおばたけよしは、この四月から新任の学校へ赴任することになった。

大庭が赴任する学校は、この四月に新設されたばかりで、開校してからむこう六年間しか存立しない。六年間だけの学校であった。今年度入学する生徒の一回生のみが、六年間をそのまま進級していき、彼らの卒業とともに廃校になる。

紺碧こんぺきの空の下に白く延びている国道329号線を、大庭猛義は沖縄中部の北中城村なかくすくせんにある学

校に向かつて車を走らせていた。沖縄には本土にある鉄道はない。すべて車かバスを利用することになる。

国道329号は具志川市を通り抜け南へ延びて、隣の沖縄市（旧コザ市）に入る。那覇市に次いで沖縄県では二番目に大きな沖縄市は、戦後、米軍の駐留以来、嘉手納基地の門前町として発展してきた。国道沿いに並ぶ横文字の看板は、いまでもその模様を物語っている。

大庭が赴任する沖縄県立北城ろう学校は、沖縄市を囲むように拡がる米軍施設の広大な芝生のグリーンに抱かれて建っていた。真新しい校舎はすべて完成したわけではなく、残りの施設を急いで建築している最中だった。

北城ろう学校に入学する児童は全県にわたっている。北は沖縄本島北部の伊江島、本部、今帰仁から、南は宮古、石垣島にまでおよび、それゆえに本校と同時に宮古、石垣の両島にも分校が開設された。生徒数も本校で百四十六名（そのうち、女子六十四名）、宮古分校で三十六名（女子十四名）、石垣島にある八重山分校は十六名（女子四名）で、総数は百九十八名にのぼった。

生徒たちを迎える教職員は校長をはじめとして、教諭、養護教諭、寮母、栄養士、専任舎監など、本校と分校を含めると総勢九十三名になった。

教職員の中には、ろう教育にたずさわってきた職員もいたが、ほとんどははじめてという未経験の職員であり、大庭もそのうちのひとりであった。

これだけの規模で、しかも一回生だけの聴覚障害者専門学校の存在は、日本国内はおろか世界

的にも稀有のことである。

どうして、こういう事態を迎えたのだろうか。

生徒たちが生まれた前年の一九六四年は、ちょうど大庭が本土の大学を卒業し、呼び戻されるようにして故郷の沖縄に帰り、盲学校ではじめて教壇に立った年でもある。

本土ではアジアで最初のオリンピックが東京で開催され、日本中が沸きかえっていた。

一方、東京から千五百キロ離れた米軍統治下の沖縄では、連日連夜ヴェトナムへと飛びたっていくB52の爆音の下、風疹はまたたく間に沖縄全土へと拡がっていた。

風疹——三日ばしか——はふつうであれば、感染しても症状の自覚もないままに三、四日を通り過ぎてしまうこともあるくらいで、沖縄の人たちは異常な拡がりの中でも、特別の関心を抱きはしなかった。妊婦に感染しても、母体には三日ばしかでしかなかった。しかし、胎児には、目に見えぬ獐猛な牙をむきだしていた。

なぜ、この時期沖縄だけに風疹が集中して流行したのであろうか。ことは沖縄だけの問題ではないように思われた。

沖縄での流行よりちょうど一年前の一九六三年から六四年にかけて、アメリカ本土でも同じように風疹が大流行していた。その結果、二万人を越す風疹障害児たちが誕生している。

アメリカのヴェトナム戦争はピークを迎えていた。米本土とヴェトナムの中継拠点であり、B52の前線基地であった沖縄、嘉手納基地。流行の兆しは嘉手納基地周辺からはじまった。因果関

係は明白と推測されはしたが、あくまでも推測の域を出ず、疑問は残され、風疹児たちは育っていった。

風疹児として生まれた子供たちが三歳になるころになって、その全貌が明らかになった。障害児は五百名にものぼり、しかも、そのうち三百名は重度障害者である。白内障、心臓疾患や、障害を合わせ持つ重複障害児、わけでも聴覚障害、いわゆる難聴の子供が大多数をしめていた。

当時沖縄は、本土復帰の動きがにわかに慌ただしくなり、相前後して遅まきながら全島的に風疹児のための早期教育、さらに特殊学級作りなどの対応策がとられるようになっていた。

一九七二年、沖縄は本土復帰となり、米軍統治から現在の沖縄県となる。

やがて、風疹児たちが中学校へ進学する時期を迎え、多数の聴覚障害児たちに一貫したろう教育を行なうべく、一九七七年八月にろう学校設置委員会ができ、翌年の四月に沖縄中部、北中城村屋宜原の米軍施設隣接地に、北城ろう学校は開校のはこびとなった。

敷地の南にあたる丘陵の頂きには、幕末にペリーが立ち寄り、その堅牢さに驚いたといわれる中城城を望みみて、二階建て二棟の鉄筋コンクリート校舎、体育館、職業訓練室、プール、そして寄宿舎、一周二百メートルのトラックがあるグラウンドなどの施設が整えられた。

学校設立の趣旨は次のようなものだった。

本校は風疹による聴覚障害児の集まりである。風疹児とは、昭和三十九年秋から、四十年の

春先にかけて、沖縄全域に大流行した風疹（三日ばしか）に罹患した妊婦から生まれた子たちである。

風疹児は幼稚園で三年、小学校で六年間の教育を各地域の小学校に設けられた難聴学級と沖縄ろう学校で行なわれてきた。

統合教育の成果は高く評価されながらも、聴力損失が著しく、小学校六年間の教育課程の履修は難しく、二、三年またはそれ以上の遅れが生じてきた。そこで本校の中等部、高等部の六カ年を一貫したろう教育の中で基礎学力と職業的知識、技能を身につけて一般社会へ送り出すことをめざして本校及び宮古、八重山の両分校が設立された。

（設立の趣旨より）

施設は整い、生徒も教師もそろって、日本で唯一、六年間だけの学校ははじまった。本校に遠い本島の生徒たちは校内にある寄宿舎に入り、そこから通うことになった。

生まれ落ちたときからろう者であり、しかもこれだけ多くの子供たちが、これから六年という限られた時間のなかで、一体何をなし得るのか。また彼らに対して、何かをなすことが出来るであろうか……。

大庭は入学式に向かう親子の間をゆっくり通り過ぎながら入っていった。盲教育のなかで経験した、盲人たちの聴覚の鋭さとすばらしさをいま、ろう者である彼らの瞳の中に探ろうとしてい